書　　評

長岡慎介.『現代イスラーム金融論』
名古屋大学出版会，2011 年，258 p.

清水　学 *

「アラブの春」の結果，チュニジア，エジプトでイスラーム主義政党の大方の予想をはるかに超える躍進がみられ，またリビアの移行政権もイスラーム法施行の意図を示唆している．イスラーム経済に対する現実的関心は何時になく強まっている．イスラームは宗教と経済活動の相互関係に宗教的に本質的な位置付けを与えている点で他の宗教と差別化される．評者は 2011 年 9 月初旬に「革命」後のカイロのエジプト証券取引所を訪問したが，当証券取引所の役員はイスラーム金融商品，特にスクーク（イスラーム債券）の本格的上場が次の課題だと述べていた．英「バンカー」誌などによれば，イスラーム金融資産は 2011 年に 1 兆米ドルの大台を突破した．全世界のヘッジファンドの運用資産の半分ほどであるにしてもイスラーム金融資産は静かに存在感を強めているといってよい．「イスラーム金融」が一般には物珍しい時代は終わり，実際に機能しうる実態をもつ金融システムという意味で既に市民権を獲得している．日本の証券会社内部でも「シャリーア・コンプライアンス（イスラーム法適合性）」という用語が日常会話に登場するようになった．

ここで取り上げる長岡慎介氏の『現代イスラーム金融論』は，日本において必ずしも珍しくはなくなったイスラーム金融論に関する著作のなかで，ある意味で画期的な意義をもつものである．イスラーム金融論は実は容易に取り組める研究テーマではない．なぜならばイスラーム法に関する最低限の歴史と論争に関する知識と，経済の証券化や金融派生商品が高度に発展しつつある今日の資本主義の新たな発展段階における金融市場の実態と意義に関する研究という，一見相異なる分野双方のプロにならなければならないからである．しかも双方とも相互に関連性をもちながら常に変動・発展している．イスラーム法を単に所与として金融面の技術的側面を検討してもイスラーム法内部で展開されている論争を見落とすことになるし，金融システムの動向自体の変化とその影響のフォローアップも欠かせない．本書によって双方に目配りをした本格的なイスラーム金融論が日本で初めて登場したというのが私の印象である．またイスラーム金融論の裾野は広い．なぜならばイスラーム金融は近代以前を含めると経済史においてどう位置付けるかという課題とつながり，経済学における古くて新しい重要問題である「貨幣とは何か」という難題とも格闘することになるからである．本書は資本主義時代およびそれ以前の経済史への関心も言及している．

なお著者は「近代イスラーム経済学の外部」からの課題へのアプローチという姿勢である．著者は，それがより広い世界史の文脈でイスラーム経済史的評価をなしうること，イスラーム金融の現代性を近代資本主義との

* 帝京大学経済学部

関係で的確に把握する視座を提供するうえで有効であると考えている．本書の構成は序章以下の7章で構成されている．序章　現代イスラーム金融論にむけて，第1章　イスラーム金融の展開と金融システム，第2章リバー論の系譜，第3章　近代イスラーム経済学の展開，第4章 「認められる利得」と「禁じられる利子」のあいだ，第5章流動性問題はいかに解かれてきたか，第6章　偶然を飼い馴らす―ガラル概念と不確実性，第7章　歴史のなかのイスラーム金融．

本書が対象とする課題は多岐にわたるが，イスラーム金融論あるいはイスラーム経済論の根幹ともいうべきリバー論を主軸に置いている．そこでは狭義の利子概念に限定されないイスラーム法のより本質的な側面から学説整理と争点を提示している．「ムダーラバ・コンセンサス」，「ムラーバハ・シンドローム」などの用語は問題点を的確に理解するうえで便利である．そのなかでリバー禁止をネガティブな側面としてみるのではなく，ポジティブな影響の観点からみようとする視点など興味深い論点も紹介されている．他方ではイスラーム金融の現実的展開と発展のなかで解決を迫られている課題をリバー論の視点を外さずに紹介・分析している．流動性確保の問題はイスラーム銀行の経営・存立の問題，あるいは在来型資本主義的銀行との競争力の視点からも重要な問題となっている．そこではモノ（商品）を媒介とする短期資本市場形成を巡る論争でもある．他方，金融派生商品がある意味では不可逆的に発展している現代資本主義における「不確実性を飼い馴らす」課題にイスラーム金融がどう対応しようとしてきたかという極めて「先端的」な問題も取り上げている．今日のイスラーム金融の課題が多様化，複雑化している状況がわかる．

著者の近代イスラーム金融の対抗軸として近代資本主義型金融を対置させているが，結論的には近代イスラーム金融を「その核心部分において，実物に埋め込まれた近代以前に見られた金融システムの特色をしっかりと受け継ぎながらも，近代資本主義型金融が優勢な現代世界において有効な金融システムとして機能している（210 p.)」と規定し，「このような普遍性と現代性を兼ね備えたものとして」イスラーム金融を位置付けようとしている．

上記の結論は含蓄に富んだものであるが，若干の感想を記してこの書評を終えたい．ひとつは1970年代頃から本格化した「近代イスラーム経済学」という学問分野の置かれた時代的背景である．著者が指摘するように方法論的には近代イスラーム経済学は近代経済学の一部に位置付けられうるであろう．その点では極めて「現代的刻印」を受けている．「パレート効率的」取引や効用関数などの分析ツールが直接あるいは比喩的に引用される．同時に「近代イスラーム経済学」が金利機能をある程度容認する「リバー限定論者」との間で一線を画しているのは興味深い．

他方，現代資本主義は特に1980年代以降，金融面で新たな段階に入っているとみられる．それは実物経済に対して金融市場が肥大化するとともに独自の主導性をもつという「主客顚倒現象」でもある．つまり現段階

の資本主義において金融そのものの役割がとりわけ研究対象としても重要になってきた時期と重なっていることである．2008 年秋のリーマン・ショックに至る住宅ローンを含む債権の証券化の暴走とその一時的破綻はその最たるものである．このような事象がイスラーム経済学内の論争を先鋭化させる面があるし，また「実物取引」に経済活動の原点を引き戻そうとする論理を有するイスラーム金融論が現存金融資本主義を客観的には批判する役割も果たしているともいえる．換言すれば「近代イスラーム経済学」と近代資本主義型金融とが必ずしも調和的でない側面を強めているのかもしれないのである．なお，現段階の資本主義における先物取引や金融派生商品の発展が「不確実性を飼い馴らす」ことを目的と掲げていることは事実であるにしても，現実に起きていることは結果として「不確実性」を拡大深化させる側面も大きくなっているのではないか，という疑念を拭い去ることはできないのである．その点での「イスラーム経済学」の貢献は注目される課題である．

第 2 に，イスラーム経済論が比較経済体制論を豊富化させる可能性である．イスラーム金融は独自の世界観あるいは価値体系に基づいて経済システムを構築しようとする運動とみることができる．その点に限っていえば社会主義運動あるいは共産主義運動も特定の世界観による経済システムの構築という点では類似している．確かにイスラーム金融は資本主義と親和性が強いということができようが，現在は多様な経済体制の模索を不可欠としている時代である．特に「ソ連型社会主義」が崩壊した後は，比較経済体制論の課題を単に社会主義対資本主義という伝統的な比較基軸から，資本主義のなかでの多様性，社会主義のなかでの多様性を混在させた多様な経済体制を比較検討して新たなビジョンを模索する時代に入っている．今日は「社会主義」中国における「主流派」経済学が新古典派経済学である時代である．第 3 に，イスラーム金融システムと「通常の」資本主義経済とが併存しているなかでの両者の相互関係は現実的にも，またイスラーム法の視点からも極めて興味深い課題である．本書では十分展開されていないが，ひとつの重要なテーマとなってくるのではないかということを予感させる．現在はプラグマティックに割り切って別々の対応を行ない両者の併存が容認されている．

最後に本書の叙述について触れておきたい．非常に印象的なのは，イスラーム経済学という複雑な課題を取り組みながら，叙述の仕方がこなれており，論理的に読みやすいことである．一見，とっつきにくいテーマを材料にしながら，いわば推理小説のなぞ解きをするような手法で論争を紹介している点は，一般の人にアクセスしやすい叙述であり，苦労の跡がしのばれる．いずれにしても，今後のイスラーム経済論の発展にとって，スタートラインとすべき試みのひとつとして注目し推薦したい．